

“ものづくり福井”のルーツを探る！

(第1期:弥生・古墳の玉作りと木工) みどころ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財保護行政の一環として、県内各地で発掘調査をおこない、調査成果を『福井県埋蔵文化財調査報告』として刊行しています。その成果には、ふるさと福井の歴史を語る出土品が数多く含まれています。

今回は、数千年にわたる歴史の流れのなかで、福井に花開いた“ものづくり”の「技(わざ)」にスポットをあて、企画展を開催します。これらは、“ものづくり福井”のルーツといえるもので、福井の特色のある自然環境や生活文化にねざして、人びとがあみだしたものです。

企画展は、年末年始をはさみ、2つに分かれます。第1期は、弥生時代から古墳時代にかけての「玉作り」と「木工」をとりあげ、関連する出土品や、発掘調査時の写真パネルを展示いたします。

これから、第1期の展示のみどころをご紹介します。

① 玉作りのルーツ —弥生時代～古墳時代—

福井県(越前・若狭)での玉作りは、山陰地方の玉作りの技術が日本海沿いに伝わり、弥生時代中期前葉[近年の研究では今から約 2,400～2,200 年前]に始まりました。この時期の玉作りは、坂井市 加戸下屋敷(かとしもやしき)遺跡、福井市 甕谷在田(こしきだにあいだ)遺跡、今市(いまいち)遺跡岩畑(いわはた)地区で確認されています。石製の道具(石針・石鋸)を用いた製作技法です。

弥生時代後期[約 2,000～1,800 年前]になると、北陸の鉄器化が進展します。拠点集落である福井市 林・藤島(はやし・ふじしま)遺跡では、多くの鉄製工具が玉作りに投入されました。

古墳時代前期[約 1,750～1,650 年前]には、福井県域での管玉の生産は下火となり、緑色凝灰岩製の腕輪形石製品が坂井市 河和田(かわだ)遺跡などで製作されました。

◆ 加戸下屋敷(かとしもやしき)遺跡

加戸下屋敷遺跡は、九頭竜川の河口近くで合流する竹田川を3km ほどさかのぼった北岸、坂井市三国町加戸に位置します。土地改良事業にともない、昭和 60(1985)年度・昭和 61

(1986)年度にかけて当センターによる発掘調査がおこなわれました。

発掘調査の結果、弥生時代中期の玉作り工房跡が発掘され、大量の玉作り関係の遺物が出土しました。加越山地の緑色凝灰岩(グリーンタフ)を加工したと考えられます。あわせて、銅鐸の石製鋳型が発掘され、青銅器生産もおこなわれていたこともわかっています。

玉作り関係の遺物には、各工程の未成品と分割に用いた石鋸、穿孔に用いた石針が存在します。施溝分割という、山陰地方から伝わった玉作りの技法が用いられています。

今回の展示では、同時に出土した弥生時代中期前半の土器群もあわせて示します。加戸下屋敷遺跡は、北陸一円でも屈指の“弥生のものでづくり拠点”でした。その全貌にせまります。



1. 玉作りの素材 加戸下屋敷遺跡



2. 擦り切り用の石器(石鋸) 加戸下屋敷遺跡



3. 石のクサビと穿孔具 加戸下屋敷遺跡



4. 管玉製作未成品と玉製品 加戸下屋敷遺跡

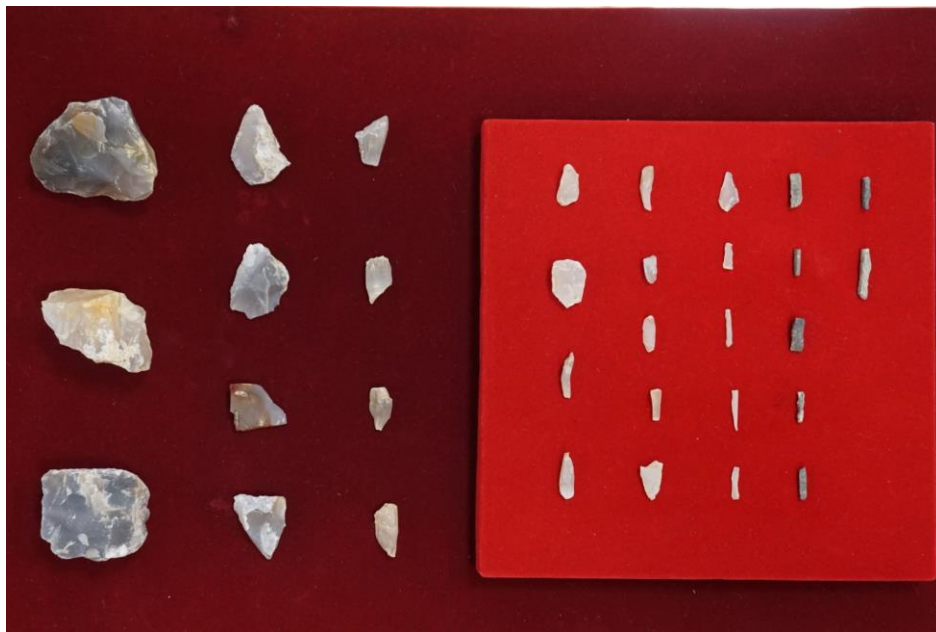
2

◆ 今市(いまいち)遺跡

今市遺跡は、福井平野南側のランドマークとして知られる文殊山の北西のふもと、福井市今市町に位置します。県立音楽堂(ハーモニーホールふくい)の建設工事にもとない、平成5(1993)年に当センターが岩畑地区の発掘調査をおこないました。

発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけてのさまざまな遺構や遺物が確認されました。今回の展示では、弥生時代中期の溝や井戸などから出土した玉作り関連遺物に注目します。

メノウ(瑪瑙)や安山岩といった、かたい岩石を材料として、玉の穿孔に用いる石針を製作していく過程がわかります。玉作りの技術は、弥生時代中期の早い段階で、福井平野の隅々までおよんでいました。メノウは緑色凝灰岩と同じ加越山地のものと予測されますが、安山岩は遠隔地から持ち込まれた可能性もあります。今後の自然科学的材質分析が期待されます。



5. 石針の製作工程(右側2列:安山岩 その他はメノウ) 今市遺跡岩畑地区

◆ 中角(なかつの)遺跡

中角遺跡は、九頭竜川下流の北岸、福井市中角町に位置します。九頭竜川等河川改修工事にもとない、平成7(1995)年～平成16(2004)年に当センターが発掘調査をおこないました。

本遺跡は中世の居館跡としても著名ですが、その下からも、自然堤防上におびただしい数の掘立柱建物や方形周溝墓・前方後方形周溝墓などが確認されました。あわせて、縄文時代から古墳時代にかけての土器や石器などが多数出土しています。

中角遺跡における玉作りは、弥生時代中期から後期にかけて散発的におこなわれており、つぎに示す林・藤島遺跡ほどには大規模ではないと考えられます。しかし、緑色凝灰岩を材料と

する各工程の未成品に加え、施溝分割の工具として用いられた紅簾片岩の石鋸も出土し、さらには工房跡と考えられる住居もみつかりました。さらに、方形周溝墓などにもなうと考えられる土坑(穴)からは多くの勾玉(まがたま)や管玉(くだたま)が出土しました。福井平野での玉作りや玉製品の流通のようすを知ることができる、貴重な調査成果だといえます。



6. 玉作り未成品 中角遺跡



7. 土坑などから出土した勾玉 中角遺跡



8. 土坑などから出土した管玉 中角遺跡



9. 発掘された玉作り工房 (中央左側の円形溝をもつ建物) 中角遺跡

◆ 林・藤島遺跡

林・藤島遺跡は、九頭竜川の下流が扇状地をへて平野部をゆるやかにながれはじめる、福井市泉田町ほかに位置します。県道大畑松岡線道路改良工事にともない、平成8(1996)年～平成15(2003)年に当センターが発掘調査をおこないました。

発掘調査の結果、弥生時代後期の玉作工房を伴う大規模な集落が確認され、土器、石器、鉄器、木器といった多様な遺物が出土しました。集落は古墳時代前期までつづくので、玉作りも長期間おこなわれた可能性があります。

林・藤島遺跡の玉作り関連遺物は、各工程の未成品に加え、工具として用いられた多数の鉄器が注目されます。弥生時代の日本海側では、近畿地方中央部をしのぐほど鉄製工具が普及していたことを示す貴重な考古資料として評価されます。

まさに、“ものづくり福井”の到達点を示す資料であり、出土品の一部が国の重要文化財に指定されています。なお、今回は指定外の資料を展示します。



10. 管玉の素材と各工程の未成品 林・藤島遺跡



11. 各種の鉄製工具 林・藤島遺跡

10・11: 阿南辰秀撮影／大阪府立弥生文化博物館提供
※今回展示しない国重要文化財指定品を一部含みます



12. 玉作り工房と考えられる竪穴建物

林・藤島遺跡



13. 玉未成品の出土状況 林・藤島遺跡

② 木工と「水のまつり」—古墳時代—

稲作の伝来にともない、鋤や鋤などの農具をつくるため、大型蛤刃石斧(ふとがたはまぐりばせきふ)などの大陸系磨製石器(たいりくけいませいせっき)が登場します。福井県地域でも、福井市今市(いまいち)遺跡岩畑(いわはた)地区や敦賀市吉河(よしこ)遺跡などで、農具や容器といった弥生時代中期前葉[今から約 2,400~2,200 年前]の木製品が出土しています。

弥生時代後期[約 2,000~1,800 年前]に入ると、①で示したように、福井市 林・藤島(はやし・ふじしま)遺跡などで多数の鉄製工具が出土しています。その中には鉄製の斧、鑿(のみ)、鉋(やりがんな)もあり、玉作りだけでなく木工にも使われたと考えられます。小浜市 府中石田(ふちゅういしだ)遺跡では、長大な針葉樹の一枚板を用いた木棺が出土しました。木材資源の活用という、“ものづくり福井”のひとつの特徴を、弥生時代の出土品から知ることができます。



14. 吉河遺跡出土の石器・石製品

下段中央が大陸系磨製石器

弥生時代のおわりから古墳時代のはじまり〔約 1,800~1,750 年前〕にかけて、倭(やまと)王権はマツリ(儀礼や祭祀および政治体制)の統一を図ります。そのあかしとして、青銅製の鏡が配布されただけでなく、精巧な木製品も共有されました。福井市糞置(くそおき)遺跡からは、これらの木製品が溝から出土しています。地域の首長が加わった「水のマツリ」が文殊山のふもとでおこなわれたことがわかります。

古墳時代前期〔約 1,750~1,650 年前〕にも、福井市小稲津(こいなづ)遺跡で「水のマツリ」がおこなわれており、足羽山の古墳群との関連が注目されます。

古墳時代中期〔約 1,650~1,550 年前〕には、王権に軍事的色彩が強くなります。福井市河合寄安(かわいよりやす)遺跡では、当時の「水のマツリ」がおこなわれた湧き水地点から、木製の刀や剣の装具や未成品が多数出土しました(福井市教育委員会の発掘調査:今回パネル展示のみ)。「倭王権では近畿中央部だけが独占的に武器をつくって地方に配布していた」との通説をくつがえし、古墳時代の研究者を驚かせました。

ここには、各地の王たちの技術交流により花開いた“ものづくり福井”の拠点があったのです。

● 糞置(くそおき)遺跡

糞置遺跡は、文殊山の北のふもと、福井市二上町・半田町に位置します。これまで多くの発掘調査がおこなわれてきました。今回展示するのは、北陸自動車道建設にともない昭和 48(1973)・昭和 49(1974)年度におこなった発掘調査、区画整理事業にともない平成 14(2002)年度・平成 15(2003)年度におこなった発掘調査、そして北陸新幹線建設にともない平成 28(2016)年度・平成 29(2017)年度にかけておこなった発掘調査の出土品です。

これまでの調査の結果、縄文時代晩期にさかのぼる河川、弥生時代から古墳時代にかけての建物跡、墓、奈良時代から平安時代にかけての建物、溝、河川を確認しています。これらからは、数多くの土器、木器、石器・石製品が出土しました。今回は、弥生時代から古墳時代にかけての木製品および土器、石器・石製品の一部を展示しています。

ひときわ目を引くのが、北陸新幹線建設にともなう発掘調査で出土した、長さ約 1.7m 幅約 45cm という大型の槽形(そうがた)木製品です。スギの一木を加工してつくられた精巧なものです。田舟だろうと考えられますが、同じ流路(川)からは紡織具や朱塗りの盾なども出土しており、「水のマツリ」との関連もうかがわれます。

また、北陸自動車道建設にともなう発掘調査で出土した、「組木机台」と報告された木製品は、「水のマツリ」の場に掲げられた「石見型」の板だと考えられます(今回パネル展示のみ)。



15. 木棺の出土状況 府中石田遺跡



16. 木器の出土状況 糞置遺跡(北陸道)



17. 出土木器(1:井戸枠 2:「石見型」板) 糞置遺跡(北陸道)



1



2

18. 出土木器 (1:匙 2:盾) 糞置遺跡(新幹線)

● 小稲津(こいなづ)遺跡

足羽川が福井平野の南よりに流れでてから、足羽山のふもとにいたる途中の南岸、福井市小稲津町に位置します。県立図書館・公文書館建設事業にともない、平成 10(1999)年度・平成 11(2000)年度に当センターにより発掘調査がおこなわれました。

発掘調査の結果、弥生時代おわりから古墳時代前期にかけての溝や土坑(穴)から、琴や木製脚といった、「水のマツリ」に関連する木製品が出土しました。

また、少し離れた同じ時期の溝からも、「水のマツリ」に用いられたと考えられる大型脚付木製品(机)2点と、用途不明の屋根形木製品1点が出土しました(今回パネル展示のみ)。



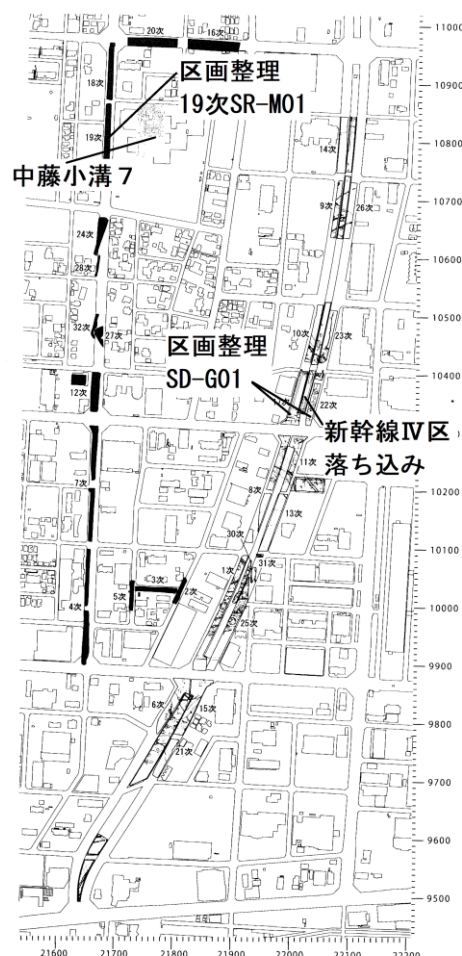
19. 木器の出土状況 小稲津遺跡

● 高柳(たかやなぎ)遺跡

九頭竜川の南岸、河合寄安遺跡からみて対岸の福井市高柳に位置します。平成 26(2014)年度に北陸新幹線の建設にともない当センターが発掘調査をおこない、弥生時代おわりから古墳時代前期にかけての落ち込み(湿地帯)から木器が出土しました。

農具などの製品にまじって、容器の未成品や加工材も出土しており、当時の木工技術を示しています。この落ち込みからは、高杯(たかつき)や丸底壺といった小型精製器種(こがたせいせいきしゅ)の土器が出土しており、ここで“水のマツリ”がおこなわれたと考えられます。

付近では区画整理事業にともない平成 10(1998)年から平成 19(2007)年にかけて福井市教育委員会が発掘調査をおこない、多くの精巧な木器が出土しています。高柳遺跡は、地理的にも、時期的にも、林・藤島遺跡と河合寄安遺跡との中間に位置し、福井平野一円をおさめた古墳時代の王と“ものづくり”とのつながりを知るうえで重要な遺跡です。



20. 木器出土地点 高柳遺跡

● 波寄三宅田(なみよせみやけだ)遺跡

九頭竜川河口を7km ほどさかのぼった西岸、福井市波寄町に位置します。一般国道 416 号線道路改良工事にともない、平成 22(2010)年度・平成 23(2011)年度にかけて発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、縄文時代から中世にかけての遺跡であることがわかりました。今回の展示では、河川跡から出土した、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする木製品に注目します。

発掘調査ではこの時期の明確な建物跡などは確認されませんでした。木製品には脚付容器・桶・線刻付紡錘車・紡織具などの精製品があり、近くに首長の居住域が存在する可能性があります。



21. 木製把手 波寄三宅田遺跡

● 曾根田(そねだ)遺跡

嶺南地域を代表する河川のひとつである北川に合流する鳥羽川の中流西岸、三方上中郡若狭町上黒田に位置します。舞鶴若狭自動車道上中インターチェンジおよびアクセス道路建設に伴い、平成 19(2007)年度から平成 21(2009)年度にかけて発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、縄文時代から中世にかけての遺跡であることがわかりました。今回は、河川跡から出土した、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての木製品や土器の一部を展示します。

スギでつくられた薄手の容器や板材は、斧、鑿(のみ)、鉋(やりがんな)といった鉄器で加工されたと考えられます。日本海沿岸の若狭地域における弥生時代鉄器化の進展や木工技術の定着がうかがわれます。

遺跡から約1km の南西には、全長 63m の前方後円墳である城山古墳があります。城山古墳は、古墳時代中期中頃につくられたと考えられ、曾根田遺跡の木製品は、これより時期がややさかのぼります。若狭地域の首長にとって生産基盤の一つとなった、“スギ材を活用したものづくり”の伝統を知るうえで重要です。



1



2

22. スギ材の木器(1:桶 2:脚付盤) 曾根田遺跡